

学び合い 助け合い

ふれあい袋井 代表 稲葉 ゆり子さん

51歳からのスタート

「51歳になったら自分の人生を歩む」、在職中に、目置いていた同僚の一言が、自分の人生を真剣に考えるきっかけとなりました。仕事と家事の両立はたいへんなときもありましたが、仕事が好きでしたので続けていました。しかし、仕事以外のことをするための余力を残しておきたいと考え、退職したので

す。それまでも、ボランティア活動や地域活動をしていましたが、もっと勉強したいという思いもありました。そんなとき、県の講座「しずおか女性カレッジ」に参加し、そこで良い仲間ができ、刺激を受けたのです。受け手が必要とするときに対応できるボランティア、地域に合ったボランティアはないかと考え始めました。

今晩の100分(100分)

以前から働く女性の支援をしたいと思っていました。退職するとき、何か自分にできることはないかと、働く友人たちに聞いたところ、「夕食のおかずが一品でもあれば嬉しいわね」と言われました。それで、毎週水曜日に食事作りを始めたのです。今では、約30食を作って、働く女性だけでなく、一人暮らしの老人や父子家庭にも届けています。

このような活動や会合に自分の家の台所や居間を開放するうちに、人が集まるようになりました。自分と同じ思いをもつ仲間が増え、皆で話し合ううち

に、「ふれあい袋井」の構想ができ、設立することになりました。

共通の理念で

「ふれあい袋井」は学びと助け合いを目的にした会員制のNPOです。

毎月、定例会を開いています。介護などの技術を学ぶ勉強はしていません。自分の心を開き、相手の気持ちを受け入れるためには、技術ではなく心が育つことだと思っています。だから、一生懸命生きている人、活動している人たちを招き、その生き方を教えていただいています。こうしたことが、共通の理念で活動することにつながっていると思います。

働く女性、子育て中の女性、高齢者、困っている人に対し、有償で会員相互の助け合いをしています。有償としたのは、助ける人、助けられる人が、対等な人間関係をもつためです。お礼の心配や気がねなどしなくてもいいし、個々の要望にも対応できます。最初のうちは、「やってやる」ではなく、「させていただく」という姿勢で助け合うというボランティア精神を理解してもらおうよう努めました。が、勉強



ふれあい袋井事務局にて

会や助け合いを続ける中で仲間は育っています。

「自分の意志と、多くの仲間の思いでやり始めたことですから、ときに大変なことがあっても、前向きに考えることにしています。どんな仕事をするときも、自分が楽しいたらいけない。嫌な思いもいっぱいする中で、経験し学んでいけると思います。相手に理解をしてもらうように努力することも大事です。ね」

さまざまな人との出会いが、自分に力を与えてくれたと、稲葉さんはいっています。

このように、同じ意志をもった人と手をつなぎ地道な活動を続けることが、地域の力になるのではないのでしょうか。

*NPO 非営利団体

本 だ な

初めて読むエンパワーメント

〔初心者向きにはこんな本はいかがでしょうか〕

①エンパワーメントの女性学

村松泰子・村松安子編 有斐閣

②男性学入門

伊藤公雄著 新曜社

③ジェンダー

原ひろ子他編 新生社

④男性改造講座

足立区女性総合センター編 ドメス出版

⑤男の座標軸

鹿島敬著 岩波新書

困った時は おたがいさま

WAC清水さわやかサービス 代表

鈴木 明与さん

24年間介護を続けて

「もともと、仕事をするのが大好きだったのだけ
れど……。でも、子どもが生まれ、当時はまだ、保育
施設なども整備されておらず、もちろん延長保育な
どもなかった。それで、仕事を続けることができな
くなってしまった」

当時のことを振り返る鈴木さん。彼女は仕事を辞
めた後、子育てと両親の介護に追われることになり
ます。「父が倒れ、半身マヒになりました。その看
病をしていた母が倒れ、寝たきりになりました。3
年後、母が他界。そこで、父には寝たきりにさせた
くないという思いで、介護を続けました」

鈴木さんは、周囲の人々にそこまでしなくてもと
言われるほど、お父さんのリハビリに力を入れたま
した。自分のことは自分でできるようになってほしい



WAC清水事務所にて

と思ったからです。

「父をしっかりと介護することが、私の仕事だと気
持ちを切り換えたのです」

介護疲れやストレスがたまらないように、介護
家族の会“に入ったり、講演会や学習会に参加した
りました。

「父が他界したときには、介護の期間が長かっただ
けに、ポツカリと穴が開いた様になりました。そこ
で今、私に何ができるのかを考えたのです」

介護経験を生かして

自分の介護の経験を活かそうと、市が声をかけて
集まったボランティアグループに参加しました。

「2年ほど活動して、ふと疑問に思ったの。行政か
らの応援を受けることは良いことだし、大変ありが
たいことです。諸々の手続きもスムーズに進むしね。
でも、レールに乗ったボランティアという気がして
なりませんでした。また、行政の支援にも限りがあ
ります。土・日曜日は時間外なので、急な依頼には
対応できません。しかし、介護者の立場からいえば、
本来に求めてほしいときに来てもらいたいのではない
のでしょうか」鈴木さんは、自身の長い介護経験を
活かし、介護者の立場にたったボランティアをやり
たいと考えました。行政がフォローできない部分を
フォローしていきたいと思ったのです。

そして、平成7年春、「WAC清水さわやかサー
ビス」が誕生しました。10名で始まった会が、今で
は80名になり、会員の中には、70歳代のお年寄りも
います。

「料理が苦手でも、掃除は得意だという人もいます
でしょう。車イスというハンデイがあっても、編み物
が得意な人もいます。自分のできることを、
それを必要とする人のお役に立てればいいのです。
困っていることをお互いに助け合う、お互い様です」
相手の自立を考え、相手にとって本当に必要だと思
われることだけをフォローします。

介護だけでなく、病院への送迎、父子家庭へのケ

⑥ 女性学への招待

井上輝子著

有斐閣

⑦ 女性学概論

山口真・山手茂共編

亜紀書房

⑧ 男女平等学習はビデオでも学べます

女子差別撤廃条約

共に学び、共に働き、共に生きる
東京女性財団

⑨ 北京女性会議の報告書

第4回女性会議及び関連事業報告書

総理府男女共同参画室

◎ここに紹介した本とビデオは、女性総合セン
ター図書室にあります。
この機会に、あなたも読んでみませんか。

ア、ベビシッターなど、活動も多彩です。

ボランティアは楽しく

WAC（ワンダフル・エイジング・クラブの頭文
字）とは、よりよく歳を重ねようという意味です。
高齢者問題は人ごとではありません。若い人も中高
齢者もそして、個人も地域も共に考えていかなけれ
ばなりません。そこで、会員だけではなく、地域の
人々に、ボランティアの輪が広がるよう学習会を開
いています。

「今できることから始めましょう。それが次の世代
に続いていくのではないのでしょうか。NPOなので、
すべての面で苦勞は絶えませんが、会員は家族の理
解と協力を得ながら、いきいきと活動しています。
やっぱり、ボランティアは楽しくやりたいですね」

男女共同参画社会を目指して

女性達が

女性の活動を支える

もくようの会 しずおか女性カレッジ一期生

学習を続けるために

『もくようの会』は静岡県女性総合センターが主催した講座「しずおか女性カレッジ」を修了した一期生30名がつくったOG会です。ともに学んだ人の輪を、これで終わりにしたくないという思いから、平成7年4月に発足しました。

活動は毎月1回の学習会を中心に行っています。4月にみんなで学びたいことを出しあって、月ごとのテーマと担当者を決めます。担当者は持ち回りです。で、会員の一人ひとりが学習会に責任を持ち、主体的に運営に関わるようになります。具体的な企画を立て、講師に依頼して、終われば感謝をこめて礼状を書くというひとつひとつの実践が、社会参画への力になっていきます。

会報を月に1回発行しており、学習会のまとめをしています。これによって、出席できなかった会員にも内容がわかるようにしています。会にはただ入っているのではなく、入っていることに責任を持つ、つまり会の活動に対し、積極的に関わることを大切にしています。

会の目的は、男女共同参画社会を目指して、学習していくこと、次に自分たちに何ができるかを考えていくこと、そして学習会の運営を通してエンパワメント（力をつけること）していくことです。ですから、学習会のテーマも、女性の人権や女性政策をめぐる社会の動きを知ることなど、女性問題に関

わることが大半です。

また年に1回、大きな講演会も主催しています。平成7年度は、日本国憲法に男女平等を起草されたベアテ・シロタ・ゴードンさん、平成8年度は、ジャーナリストの下村満子さんをお迎えしました。このような講演会を主催することによって、多くの人と女性問題について考える機会を持ち、他の女性団体とも交流することを目指しています。

ネットワークの広がり求めて

代表の秋野征子さんは「会員の中にも草の根ネットワークを作って活動を始めた人がいますが、女性たちが女性の活動を支えていくようになることが理想だと思っています。『もくようの会』も、会員の地域活動を心からサポートしていきたいと思っています。私は「エンパワメント」には三つの要素があると思っています。自分自身が力をつけること、活動している人を支援すること、支援はできなくても心から拍手を送ること、です。女性が力をつけて、その力を発揮できるような社会にするためにも、動き始めた女性を女性たちが支えることが必要です。その気持ちも多く女性たちに伝え、手をつなぎたいと思います」と話してくれました。

そのことについて会員の田村信子さんは「まず家



講演を聞いて学習中の皆さん

族からです。家族へ。近所へ。街へ。そうやって人々とのつながり、つまりネットワークの広がりを求めていきたいと思っています」と語ってくれました。今後は、男女共同参画が進み、これからの女性は多様で自分らしい生き方を選択していくことでしょう。そんな女性たちを支援したいと秋野さんたちは願っています。

今、学校では

「専業主婦を考える」

静岡大学教育学部附属静岡小学校6年3組

社会科で江戸時代の武士の暮らしを学習していたとき、ひとりの女子の児童が発言した。

「自分の上下関係が大変厳しく、特に女性は男性に従うものとされてきたから、女性の暮らしは辛いものだったと思う」

周りの男子は「今は逆だよ。女の方が威張っている」と言い出し、女子は「男が威張らないから悪いんだよ」と言う。

そこで、担任の江川正徳先生は「男だから、女だからということ、得をしたこと、嫌だと思ったこと」を子どもたちに聞いてみた。

「男だからって、重たいものを持たされる」

「女は仕事も家事も忙しい」

ここから、取り組みが始まった。男女差別について、話を聞く、歴史を調べる、発表する。1週間間に、子どもたちは、様々な現実をつかみ、自分なりに考えていった。

まず自分の家庭の様子など身近なところから考えていくと、専業主婦について、意見が分かれた。

「専業主婦は自由な時間があるからいい」

「自分の生きがいがないから外で働きたい」

ここで、テーマを「女性は専業主婦がいいのか、外で働いた方がいいのか」として、後日話し合うことになった。

それから調査活動が始まった。アンケートを取ったり、市役所や家庭裁判所など様々な所へ聞きいたり、統計資料を調べたり。

OLからヘルパーへ

裾野市高齢者介護ホーム「いずみ荘」2級ヘルパー

真田 恵さん

転職への決心

「今の仕事が楽しくてとても充実しています。年齢にこだわらず、やりたいと思ったことにチャレンジしたのです」と転職した理由を真田さんは話し出しました。

高校卒業後、沼津の証券会社に約17年間勤め、その間に結婚し、2児を出産しました。仕事は営業で、成績は常にトップクラス。高給で何一つ不満はありませんでした。「会社が一番。子どもが熱を出しても、子どもは親にみてもらい私は会社へ行きました。私はなんでもできて凄いです、そこの主婦とは違う！とすごく傲慢なことを思っていたのですよ」それが、祖父の死により、「自分は良い人生だったと思って死ぬのだろうか。自分は一体何をしたいのか？このままでもいいの？」と自分に問いかけたのです。そして、中学時代は、福祉の仕事をしたかったという



「いずみ荘」で働く真田さん

ことを思い出しました。「自分の人生なのだから、自分が本当にやりたいことをやろう」と思い、退職する決心をしました。親は反対しましたが、夫は理解してくれました。

福祉の道へ

まず何か資格を身に付けようと、医療事務やワーカーの資格を取りました。その後、知人から2級ヘルパーの講座があると聞き、早速申し込みにいきました。「私はこの講座を受け、ヘルパーの資格をとりたい」という強い思いがあり、面接した人に「なんとしても受けたいです」と訴えました。講座を受けてみて、「自分の求めていたもの探していたものはこれだ」と大声で叫びだしたくなるくらい喜びを感じました。また、思い上がっていた時には聞けなかった他人の言葉も、素直に聞くことができるようになりました。そして改めて自分は人と接することが好きなのだと感じました。

ヘルパーとして活動開始

受講しても求人がなく、現実はとても厳しいといわれています。それでも、資格を活かそうと自分から探し回り、平成7年10月から、老人ホームや、病院のヘルパーとして働きました。

現在は「いずみ荘」に勤務しています。ここ「いずみ荘」は、老人が、仲間と一緒に、体操をしたり、散歩をしたり、絵を描いたりして1日を過ごす施設です。

「ここでの仕事にも慣れ、やりがいを感じています。いつも来所されている方が休むと、心配になったり、淋しさを感じますね。今後、自分がどのように福祉に関わっていくか模索中です」と話す真田さんに、前向きな姿勢を感じました。

今の自分が好き

「今は肩の力が抜け、気持ちもゆったりしています。のんびりしすぎて子どもにもフォローされますが…。

さて、クラスでの討論はどうなったか？

● 家事は何も残るものがない。外で仕事をして形に残ることをしたい。

● 仕事、家事、育児と、時間に追われるだけなら、専業主婦の方がいい。

● 働くなら、育児休業を3～5年にして欲しい。

● 街でアンケートをとったけど、多くの男性は帰った時、女性に家において欲しいと思っている。女性も子どもが帰った時に家においてやりたいと思う人が多い。

● 子どもと一緒にいる時間が長ければいいんじゃないかと、内容が大事だと思う。家事も夫婦で分担すればいい。

● 専業主婦の方がいい。母親が外で働いていると朝忙しいから、僕のお弁当が冷凍食品になる。

● 女性が外で働けば、男性の仕事が減って、男性が家に帰る時間が早くなる。子どもと一緒に時間が増えるから、その方がいい。

● 女性が外で働く子どもが産めなくなる。少子化が進行しているから、女性は家にいた方がいいと思う。

● 夢をかかなえるために働きたい。少子化になるからって、あきらめるのはいや。

● 男には男の、女には女の仕事があると思う。それぞれ合った仕事をするのは差別にならない。女性には専業主婦という仕事があると思う。

● 男女に関係なく、個人の違いだと思う。男女で分けることが自然に差別になっている。世間の常識のように決めつけるのはやめて、一人ひとりが何ができるか確かめればいいと思う。

今までは人に評価されることを自負していたけれど、誰かに評価されなくても自分が納得すればいいのではないかと思うようになりました。私は普通の人なんだと今は思っています。最近、剣道をやり始めました。子どもと3人で道場に行くのが楽しみです。いつまでもチャレンジすることを、忘れないでいたいです」

明るい笑顔の中に、真田さんの強い意志を感じました。